暴かれた真実・業界黙示録

「暴かれた真実・業界黙示録」は、実際に起こったパチンコ・スロット業界の事件・詐欺・摘発などをもとに構成された実録風ドキュメント連載である。登場人物や店名は仮名化されているが、事件の内容は極力事実に基づき構成されている。閉ざされたホールの奥で何が起こっていたのか――いま、その真実が暴かれる。

File.10 実録・堕ちた管理者――積み上げた信頼が、欲望に換金された夜

その「違和感」が感知されたのは、店舗の喧騒から離れた本社の会議室だった。北関東の国道沿いに位置する「P店」。設置台数500台強、稼働率も良好な地域優良店である。送られてくる月次レポートの数字だけを見れば、P店は順調そのものに見えた。だが、データを統括するエリア長には、数字の裏側に潜む微細なノイズが見えていた。それは決定的なエラーではない。パチンコ・パチスロという確率の遊技において、本来なら「誤差」として片付けられる範囲の揺らぎだ。しかし、その揺らぎは、ある特定の法則性を持って繰り返されていた。「高設定投入時の勝率が、あまりにも『綺麗』すぎる」エリア長は、タブレットに表示された特定機種のスランプグラフを凝視した。店側が「出す」と決めて設定6を投入した台が、ほぼ100%の確率でプラス域に着地している。もちろん、高設定なのだから勝つのは当然だ。だが、現場を知る人間なら誰でも知る通り、設定6でも展開が悪ければマイナスを叩くし、客が見切れずに捨ててしまうことだってある。数ヶ月単位で見れば理論値に収束していくが、単日ごとのデータはもっと暴れるはずなのだ。しかし、P店の特定のシマだけは、不確定要素が存在しない かのように、店側の意図通り、いや、「何者かの意図通り」に赤字を吐き出し続けていた。

誰かが、答えを知っている。それも、朝の抽選を受ける前の段階で、「今日、どの台に座れば勝てるか」を正確に把握している人間がいる。エリア長は即座にセキュリティ会社へ連絡を入れ、監視カメラ映像の解析と、ホルコン（ホールコンピュータ）データの詳細な突き合わせを命じた。そこに映っていたのは、派手なゴト師集団でも、威圧的なプロ軍団でもなかった。目立たない服装の、どこにでもいそうな数人の男たち。彼らは新台には目もくれず、メイン機種のシマへ向かうと、データ機器をチェックする素振りさえ見せずに、一直線に特定の台を押さえる。ガックンチェックもしない。まるで、そこにお宝が埋まっていることが確定しているかのように腰を下ろし、淡々とメダルを借り始める。そして、彼らが座った台は、その日の最高設定台と、恐ろしいほどの精度で一致していた。「内部に、協力者がいる」それも、設定キーを管理し、その日の配分を決定できる権限を持つ人間だ。疑いの目は、必然的に現場の最高責任者である店長に向けられた。

店長の名を、仮に葛城（かつらぎ）とする。当時42歳。社歴15年。新卒入社以来、現場一筋で叩き上げられたベテランである。性格は温厚で豪放磊落。部下からの人望も厚く、常連客の顔と名前を覚え、笑顔で挨拶を交わす「頼れる店長」そのものだった。会社側としても、葛城は将来の幹部候補として期待を寄せる人材だった。彼が不正に手を染めているとは、誰も信じたくなかった。だが、調査が進み、葛城の私生活という「皮」を一枚めくると、そこには本人すら制御不能になった腐敗の根が広がっていた。

きっかけは、ありふれた金銭トラブルだった。数年前、将来への不安から手を出したFX（外国為替証拠金取引）。最初は利益が出たものの、市場の急変動でロスカットに遭い、瞬く間に数百万円の損失を抱えた。「負けを取り戻さなければならない」。焦りは正常な判断力を奪う。葛城は消費者金融に手を出し、複数のカードローンを自転車操業で回すようになった。ホールでは笑顔で振る舞いながら、葛城の精神は限界まで磨り減っていた。そんな葛城の心の隙間に忍び寄ったのが、馬場（ばば）という男だった。馬場は特定の組織に属さないフリーランスのブローカーだった。葛城が行きつけの居酒屋で一人飲んでいる際、馬場は偶然を装って近づき、金銭的な不安を聞き出すと、悪魔の提案を囁いた。「店長、なにも店の金庫から金を抜けって言ってるんじゃない。それは犯罪だ」馬場は酒を注ぎながら、優しい声色で言った。「ただ、明日の『熱い場所』を少し教えてくれるだけでいい。店だって、どうせ設定を入れて客に出させる予定なんだろう？ それを誰が打とうが、店の赤字額は変わらない。誰も損はしないんですよ」誰も損はしない。その言葉は、罪悪感に苛まれる葛城にとって麻薬のような鎮痛剤だった。確かに、誰が打とうが帳簿上の数字は同じだ。そう自分に言い聞かせた。最初は「次の入れ替え、バジリスクに力を入れる」といった漠然としたヒントだった。だが、馬場はその対価として数万円の入った封筒を葛城のポケットにねじ込んだ。喉から手が出るほど欲しかった即金。葛城の手は震えていたが、その封筒を突き返すことはできなかった。

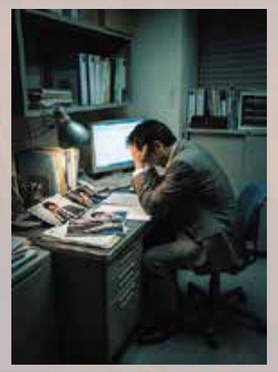
一度越えた一線は、二度と戻れない境界線だった。一度甘い汁を吸った関係は、急速にエスカレートしていく。馬場の要求は、徐々に具体的になっていった。「機種の示唆じゃツモれない。確実な場所を教えろ」「明日の旧イベント日、角から3番目を6にしておけ」もはやヒントではない。命令だった。葛城は借金返済のために、店の営業計画を歪め始めた。本来なら、常連客への還元としてランダムに散らすべき高設定を、馬場が指定する特定の台に集中させた。さらに、馬場のグループが確実に勝てるよう、他の台の設定を下げ、一般客から厳しく回収する営業スタイルへと変貌させていった。

P店の空気は、ゆっくりと、しかし確実に淀み始めた。パチンコホールの空気を作るのは「客の熱気」だ。だが、その熱気が冷め始めた。「最近、あの店は勝てない」「いつも知らない顔ばかり座っている」。常連客は敏感だ。言葉にはしなくとも、肌感覚で「不公平」を察知する。朝の並びから馴染みの顔が消え、殺伐とした目つきのプロ崩れが増える。店全体の稼働が落ちれば、売上確保のために葛城はさらに一般客への釘や設定を締めざるを得なくなる。そして、自分の懐を潤すために、馬場への情報提供だけは止めることができない。葛城は、自らの手で店の首を絞め、窒息させようとしていた。

Xデーは、本社監査部とセキュリティ会社によって慎重に設定された。証拠は揃っている。メールの履歴、馬場との接触映像、そして異常値を示し続けるデータ。あとは、言い逃れのできない「現行犯」に近い形で押さえるだけだった。決行日は、特定日とされる旧イベント日。早朝の設定変更時間。葛城は「部下の手を煩わせたくない」という理由をつけ、一人でシマに入った。本来なら役職者と二人一組で行うべき業務を、常態的に一人で行うようになっていたこと自体が、管理体制の甘さを示す証拠でもあった。変更を終えた葛城が、ポケットから私用のスマートフォンを取り出す。周囲を警戒し、画面を操作して短いメッセージを打ち込む。「セット完了。右カド、中3、左5。整理券は？」その瞬間、天井の隅に増設された隠しカメラが、葛城の指の動きと、画面の光を鮮明に捉えていた。送信ボタンを押した直後、店の外の駐車場で待機していた馬場の携帯が鳴る。情報の受け渡しが完了した瞬間だった。

開店直前。馬場の手配した打ち子たちが指定台に座り、遊技を開始する。その光景を確認したところで、本社監査部の人間が店長室のドアを開けた。「お疲れ様です」何も知らない葛城は反射的に愛想笑いを浮かべたが、男たちの表情を見て凍りついた。監査部長は無言のまま、一枚の紙をデスクに置いた。それは、先ほど葛城が送信したメールの内容と、今まさに稼働し始めた台番の一致を示す図面だった。さらに、過去数ヶ月にわたる馬場のグループの収支データ、駐車場での現金授受の写真が並べられる。「葛城、説明できるか？」葛城の顔から血の気が引いた。唇がわななき、言い訳をしようとしたが声にはならなかった。「お前が売ったのは、ただの設定情報じゃない。ウチの会社の看板と、この店を信じて通ってくれていたお客様の信頼だ」その言葉は鋭く、葛城の心臓に突き刺さった。

葛城は即日、懲戒解雇処分となった。会社側は背任行為による損害賠償請求を行った。被害額の算定には、馬場のグループが不正に得た出玉相当額だけでなく、信用毀損による逸失利益も含まれるべきだという厳しい議論もなされたが、最終的には数千万円規模の請求が葛城個人に通知された。当然、葛城に支払い能力はない。彼が得た報酬は総額でも百万円に満たない端金（はしたがね）。その僅かな金と引き換えに、彼は15年かけて築き上げたキャリア、社会的信用、そして家族さえも失うことになった。自己破産への道を歩む彼の背中は、あまりにも小さく、惨めだった。



事件は、葛城の追放によって幕を閉じた。P店は直ちに新体制となり、「リニューアル」と称して全台の設定配分を一新した。セキュリティは抜本的に見直され、設定変更にはエリア長または第三者の立ち会いが義務付けられた。さらに、ホールコンピュータによる異常数値検知プログラムが強化され、理論値から逸脱した出玉推移を即座に本社へアラートする監視体制が敷かれた。物理的な膿は出し切った。企業としての自浄作用は働いた。だが、一度失われた「見えない信頼」を取り戻すことは、容易ではない。

この事件が業界に残した教訓と傷跡は、数字以上に深い。ホールという場所は、客と店との間の極めて危ういバランスの上に成り立っている。客は、「店は利益を取る商売だ」と知っている。それでも足を運ぶのは、「運が良ければ勝てる」「そこには公平な抽選がある」という前提を信じているからだ。設定も、釘も、内部の状態はブラックボックスだ。見えないからこそ、そこには犯してはならない信義則がなければならない。葛城が犯した罪の本質は、会社の金を横領したことではない。その信義則を、自らの手で売り渡したことにある。

葛城がいなくなった後のP店。新しい店長が、汗をかきながらホールを回っている。一度離れてしまった常連客に頭を下げ、不審なプロ集団を徹底的に排除し、少しでも客滞率を上げようと腐心している。その努力が報われ、かつての賑わいが戻るまでには、まだ長い時間が必要だろう。葛城が数万円で売り渡した信頼は、一夜にして消えたが、それを取り戻すには数年単位の月日がかかる。

暴かれたのは、派手な大事件ではない。どこにでもあるホールで、どこにでもいそうな真面目な男が、ふとしたきっかけで一線を越え、静かに破滅していった記録だ。今日も全国のホールのどこかで、設定キーが回される。その鍵が、客の期待を開けるためのものであり続けるのか、それとも個人の欲望のために回されるのか。我々ユーザーは、シマの向こう側にいる人間の「良心」を信じて、レバーを叩くしかない。